

## 生育が旺盛で美しいピンク色秋系スプレーギク 新品種「スプレーアイチ秋1号」の特性と栽培技術



愛知県農業総合試験場では、スプレーギク品種の開発に取り組んでいます。  
このたび10～6月に出荷するピンク色秋系品種「スプレーアイチ秋1号」  
(2015年出願公表、流通名：あいむルーラ)を育成しました。

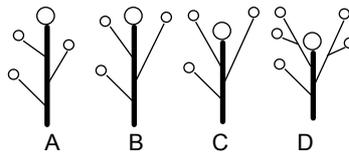
「スプレーアイチ秋1号」は比較的高温になる6月と10月開花作型においても花弁がピンク色を保ち、満開時でも花弁の角度が斜め上向きの状態を保つといった、優れた特徴を持つ品種です。また、低温伸長性に優れ、茎葉にボリュームがあります。

## 品種の特性

- 花色はピンク色の秋系品種である。
- 高温期(6月、10月)の開花でも花色が淡くなりにくい(図1、表1)。
- 伸長性は高く、茎葉のボリュームが大きい(図2)。
- 到花週数は6週半～7週半程度である。
- スプレーフォーメーション<sup>注)</sup>はBタイプが多い。
- 日持ち性は既存品種と同程度である。



図2 「スプレーアイチ秋1号」と対照品種の草姿  
中央が「スプレーアイチ秋1号」左が「プリティララ」右が「レーガンエリートピンク」



注) スプレーフォーメーション  
模式図(以後の説明でも同じ)



「スプレーアイチ秋1号」

「プリティララ」  
(対照品種)

図1 10月における「スプレーアイチ秋1号」の花色

表1 開花時期と「スプレーアイチ秋1号」の花色

品種	2012年		2013年		
	10月 無加温	12月 無加温	2月 夜温15°C	3月 夜温15°C	6月 無加温
スプレー アイチ秋1号	9202 淡紫ピンク	9203 紫ピンク	9203 紫ピンク	9203 紫ピンク	9202 淡紫ピンク
プリティ ララ	9201 ピンク白	9202 淡紫ピンク	9202 淡紫ピンク	9202 淡紫ピンク	9201 ピンク白

※ 色名と数字は日本園芸植物標準色票による

## 作付体系

出荷時期		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
10月	3月		○	▲	〰	■	○	▲	〰	■			
11月	4月		○	▲	〰	■	○	▲	〰	■			
12月	5月			○	▲	〰	■	○	▲	〰	■		
1月	6月				○	▲	〰	■	○	▲	〰	■	
2月						○	▲	〰	■				

○:定植 ▲:電照打ち切り(消灯) 〰:シェード ■:収穫

※「電照打ち切り」は、以後の説明では「消灯」とする。

## 栽培管理

### 親株管理

- 親株の生産性は良好であり、既存品種と同規模の親株面積とする。
- 伸びすぎた枝から採穂すると、早期発蕾やフォーメーションの乱れが見られるので、適期の採穂に努める(図3)。

### 栽植密度

- 栽植密度は、慣行と同等とする。

### 電照・日長管理

- 電照は暗期中断4時間とする。
- 消灯後は11~12時間日長程度にする。
- 栄養成長期間が長いと、スプレーフォーメーションが乱れやすいので、消灯時の草丈を伸ばしすぎないように注意する(表3、図4)。

表3 栄養成長期間の違いと生育、開花  
(6月開花作型)

栄養成長期間	到花日数	草丈(cm)		切り花全重(g)	90cm長調整重(g)
		消灯時	開花時		
35日	48	48	132	137	91
28日	48	34	118	120	92

※3/20直挿し、4/24消灯、無加温

表4 開花作型ごとの草丈

品種名	草丈(cm)									
	10月		12月		2月		3月		6月	
	消灯時	開花時	消灯時	開花時	消灯時	開花時	消灯時	開花時	消灯時	開花時
スプレーイチ秋1号	33	111	39	112	41	102	37	96	37	123
プリティラ	32	106	30	100	31	89	26	80	32	119

※開花作型ごとの栽培概要

10月:セル成型苗定植から消灯まで24日、無加温

12月:セル成型苗定植から消灯まで26日、無加温

2月:直挿しから消灯まで41日、最低夜温15°C

3月:直挿しから消灯まで35日、最低夜温15°C

6月:直挿しから消灯まで35日、無加温

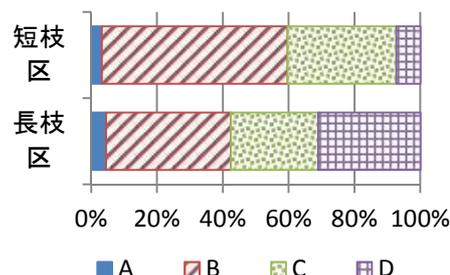


図3 採穂時における親株の枝の長さとしプレーフォーメーション別発生割合 (6月開花作型)

2015/3/20直挿し、4/24消灯

※短枝区は、20cm以下の短い枝から採穂、長枝区は、20cm以上伸びた枝から採穂。

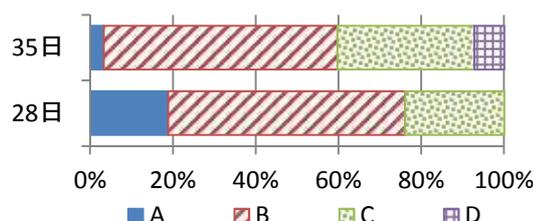


図4 栄養成長期間の違いとしプレーフォーメーション別発生割合 (6月開花作型)

草丈は既存品種と比較して伸びやすく、低温期でも十分確保しやすい(表4)。

# 温度管理

- 低温で管理すると開花が遅れたり、スプレーフォーメーションが乱れたりする(図5、表5)。
- スプレーフォーメーションの乱れを防ぐために、
  - ・ 栄養成長期間(消灯前)は、最低夜温を14~15℃以上とする。
  - ・ 花芽分化期(消灯後)は、最低夜温を17~18℃以上とする。(図5、6、7)
- 隙間からの冷気や、温度むらで低温に遭遇しないように、施設の保温に努め、十分に加温する。

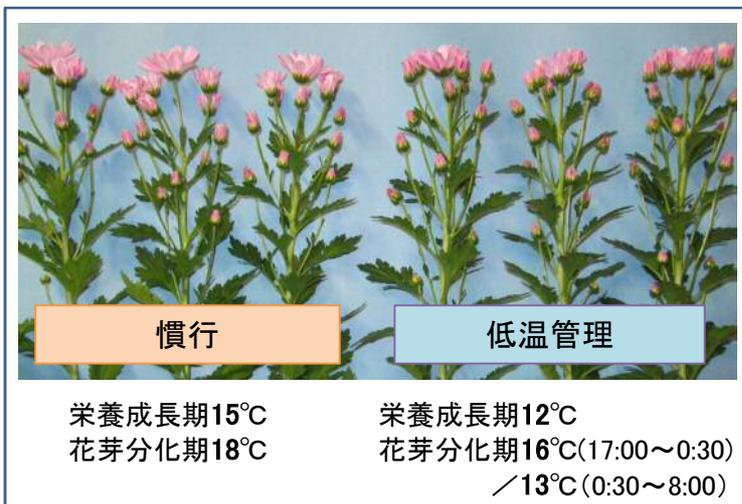


表5 温度管理と到花日数  
(1月開花作型<sup>1)</sup>)

温度管理	到花日数 (日)
低温管理	50.5
慣行	48.3

1) 10/28定植、11/27消灯  
2) 温度管理は図5に同じ

図5 温度管理の違いとスプレーフォーメーション(1月開花作型※)  
※ 10/28定植、11/27消灯

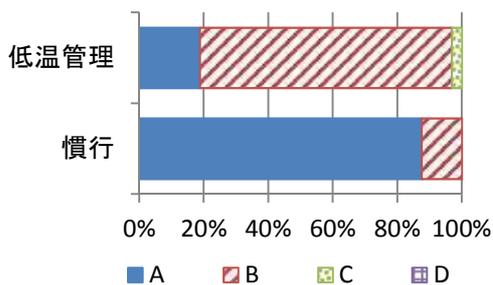


図6 温度管理とスプレーフォーメーション別発生割合(1月開花作型)  
(定植・消灯日及び温度管理方法は図5に同じ)

- ・ 消灯前12℃で、消灯後16℃/13℃の変夜温管理ではBタイプが多かった。
- ・ 消灯前15℃、消灯後18℃で十分加温する慣行の温度管理ではAタイプが大半であった。

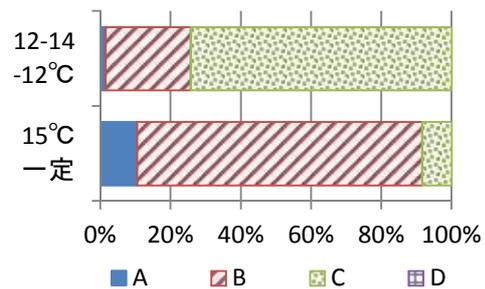


図7 温度管理とスプレーフォーメーション別発生割合(2月開花作型※)

※ 11/26定植、12/24消灯、消灯前12℃消灯後14℃2週後12℃と定植から開花まで15℃一定の区

- ・ 消灯前12℃消灯後14℃の低い温度管理ではCタイプが多かった。
- ・ 消灯前後とも15℃一定の温度管理ではBタイプが大半であった。

## 植物成長調整剤処理

- ボリュームがあり、伸長性の高い品種なので、わい化剤やジベレリンの散布は不要である(表6)。
- 消灯後のジベレリン散布は、側蕾の花首が伸びてフォーメーションを乱すことがあるので行わない(図8、9)。

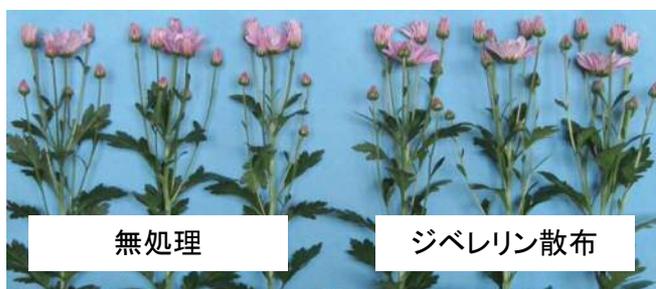


図8 ジベレリン散布とスプレーフォーメーション  
(2月開花作型・低温管理)

※ 11/26定植、12/24消灯、消灯前12°C消灯後14°C2週後12°C  
ジベレリンは消灯当日と消灯12日後の2回散布

表6 わい化剤散布と生育・開花  
(3月開花作型)

処理	開花時 草丈 (cm)	花首長 (cm)	切り花 全重 (g)	80cm長 調整重 (g)
ダミノ ジッド <sup>1)</sup>	93.1	7.5	93.4	75.3
無処理	102.4	9.0	90.8	65.6

※12/26定植、1/30消灯

1) 消灯14日後にダミノジッド600ppm散布

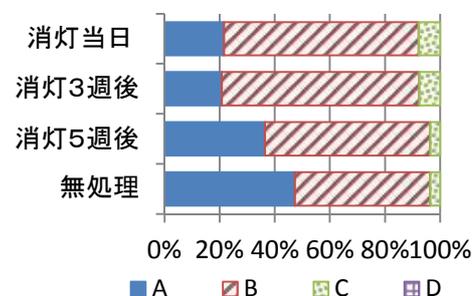


図9 ジベレリン散布時期とスプレー  
フォーメーション別発生割合  
(3月開花作型)

## 病害虫対策

- 既存品種と同様に、ハダニ、アブラムシ、アザミウマ、ハモグリバエ等の発生に備えて、防除を行う。
- 白さび病には罹りやすい品種なので、特に注意して防除に努める。

## 栽培許諾

「スプレーアイチ秋1号」は種苗法に基づく登録品種であり、栽培には愛知県との許諾契約が必要である。

連絡先：農林水産部 農業経営課 技術調整グループ

TEL：052-954-6410 E-mail：nogyo-keiei@pref.aichi.lg.jp